

【研究分担課題名】 HIV 感染症患者の地域・年齢分布と受診行動の現状調査  
研究代表者：猪狩 英俊 千葉大学医学部附属病院・感染制御部長 准教授  
研究分担者：塚田弘樹 東京慈恵会医科大学附属柏病院 感染制御部 教授  
研究分担者 佐々木信一 順天堂大学医学部 教授

研究要旨：千葉県 HIV 拠点病院会議(事務局 千葉大学医学部附属病院)の活動基盤を利用し、拠点病院集中型の HIV 診療から地域連携を重視した HIV 診療体制の構築を目的とした。地域での HIV 感染症診療の現状把握を目的に行政と協力し、東京に近い自治体(船橋・市川・松戸・柏・浦安)での受診行動を調査した。

千葉県内の HIV 感染症患者は 40 歳代が多かった。50 歳以上の患者比率は、自治体間で差がみられた。しかし、今後 10 年後には 50 歳以上の患者比率が確実に増加する。

東京に近い自治体(船橋・松戸・柏・浦安)では東京依存型の受診行動である。潜在的患者(東京受診)を過小評価し、地域の現状医療資源を額面通り評価すると、高齢化社会に対応した HIV 診療が後手に回る可能性がある。市川は、東京依存型から千葉県内の医療機関にシフトしてきた。千葉市は、比較的地域完結型の受診行動をみられ、2 つの拠点病院を中心とする診療体制が確立していた。高齢化(50 歳以上の患者)の進行を想定し、拠点病院と地域の医療機関との連携を進める基盤が整備されている。

患者数が多い東京近郊地域では、東京都内の病院での診療を受けている HIV 感染症患者が多いことは例年通りであった。しかし、高齢者では地域の病院で診療を受ける患者が増加している。今後 HIV 感染症患者の高齢化が進行することを想定した、千葉県内の HIV 診療体制の構築が必要である。

## A. 研究目的

HIV 感染症患者の受診動向を把握する。全国的に HIV 感染症患者の高齢化が進行している。千葉県の免疫機能障害で自立支援医療を受けている者は、1394 人であった。(2020 年 3 月 31 日現在) 年齢階級では、18 歳未満は 0 人(0%)、18-39 歳は 349 人(25%)、40-64 歳は 865 人(62%)、65 歳以上は 179 人(13%)であった。全国的な動向を踏まえ、HIV 患者の高齢化を想定した診療体制を構築する必要がある。

市町村別に分析すると、千葉市・船橋市・市川市・松戸市・柏市・浦安市の 6 自治体でおおよそ 60%の免疫機能障害者がいることが示された。千葉市を含む東京に隣接する自治体での HIV 感染症患者の診療体制を整備することが重要である。特に、船橋市と市川市にはエイズ診療拠点病院がないことは、今後の HIV 感染症診療に影響をもたらす可能性がある。

## B. 研究方法

千葉市障害者福祉センターに依頼し、2020 年度の自立支援医療の対象患者の年齢と診療病院を調査する。船橋市・市川市・柏市・松戸市 各自治体の自立支援医療担当部署に依頼し、自立支援医

療の対象患者の年齢と診療病院を調査する。(年齢と診療病院情報は非連結) (千葉市分は、千葉大学大学院医学研究院にて倫理審査承認。他地域は、個人情報に抵触しない範囲での情報提供をとりました。)

## C. 研究結果

1 調査対象患者総数は 769 人で千葉県内の免疫機能障害の自立支援医療を受けている患者の 55.2%に相当する。

2 船橋市を除く各自治体ともに 40-49 歳の患者が最頻度であった。船橋市は 50-59 歳の患者が最も多かった。50 歳以上を割合で見ると各地域でその割合が増加している。

自治体	年齢区分とその比率(%)	2018 比
千葉市	50 歳以上	43.9%(→)
船橋市	50 歳以上	48.6%(↑)
市川市	50 歳以上	42.5%(↑)
松戸市	50 歳以上	43.3%(↑)
柏市	50 歳以上	38.9%(比較データなし)
浦安市	50 歳以上	21.3%(比較データなし)

### 3 受診行動 (県内受診か東京等の他地域受診か)

自治体	県内受診(2018年比)
千葉市	70.7%(↓)
船橋市	34.8%(↓)
市川市	64.1%(↑)
松戸市	データなし
柏市	40.0%(↑)
浦安市	34.7%

千葉市と市川市を除く自治体では、千葉県内で診療する人は少なく、東京依存型の受診行動をとっている。(松戸市はデータがないがこれまでのデータから推測)

#### 4 年齢別の受診行動(千葉市のみ)

千葉市では70.7%が県内受診をしていたが、40-49歳の患者層ではその36%が東京での診療を受けていた。しかし、昨年と比較すると東京依存傾向が解消しつつあった。千葉市内の病院を受診する患者は135人で全体の65.9%であった。その内訳は、千葉大学医学部附属病院と国立病院機構千葉医療センターなど千葉市内の病院受診が135人であった。千葉市内のHIV診療体制が整備された結果、地域内で完結する受診行動にシフトしてきていることが分かった。

### D. 考察

千葉県内のHIV感染症患者は40歳代が多かった。50歳以上の患者比率は、自治体間で差がみられた。しかし、今後10年後には50歳以上の患者比率が確実に増加する。

東京に近い自治体(船橋・松戸・柏・浦安)では東京依存型の受診行動である。市川市については、東京依存型から千葉県の医療機関へシフトしてきた。潜在的患者(東京受診)を過小評価し、地域の現状医療資源を額面通り評価すると、高齢化社会に対応したHIV診療が後手に回る可能性がある。

千葉市は、比較的地域完結型の受診行動をみられ、2つの拠点病院を中心とする診療体制が確立していた。高齢化(50歳以上の患者)の進行を想定し、拠点病院と地域の医療機関との連携を進める基盤が整備されている。

### E. 結論

千葉県内のHIV患者の年齢分布、受診行動、自治体間の違いを明らかにした。高齢化と東京依存型の受診行動を想定し、千葉県内のHIV診療体制の構築が必要である。

### F. 健康危険情報

本研究では介入研究ではないため特記すべき健康危険情報はありません。

### G. 研究発表

#### 1 論文発表

なし

#### 2 学会発表

柴田幸治、猪狩英俊 高齢者福祉施設におけるHIV感染者受け入れに関する調査 日本エイズ学会、2020年、千葉

遠藤千鶴、木暮みどり、岩崎春江、古谷佳苗、齊藤陽子、HIV患者の社会的背景やニーズ、不安、差別体験が治療継続に及ぼす影響に関する研究 第一報 第34回日本エイズ学会、千葉

谷口俊文 千葉大学におけるMSMコホートの取り組み 第34回日本エイズ学会、千葉 シンポジウム

谷口俊文 新型コロナ重点医療機関の役割とHIV診療への影響 第34回日本エイズ学会、千葉 シンポジウム

谷口俊文 長期療養時代におけるダルナビルの臨床的意義 第34回日本エイズ学会、千葉

谷口俊文 処方経験から見えてくる2剤療法(DTG/3TC)の価値 第34回日本エイズ学会、千葉

谷口俊文 With/After COVID-19時代におけるARTのNew Normal 第34回日本エイズ学会、千葉

築地茉莉子 他、抗HIV療法における意思決定とアドヒアランスにする多施設共同研究(DEARS-J study) 第34回日本エイズ学会、千葉

### H. 知的財産権の出願・登録状況

現時点では特許取得、実用新案登録の予定はありません。